

医学部予備校
富士学院
学院長

坂本友寛



医学部受験の現状と 医学部合格に向けて 求められる力



医学部受験は年々難易度・倍率共に上昇しており、東大・京大と並ぶ最難関の1つです。

また、医学部受験は高い学力水準だけでなく、小論文や面接など、その人の考え方や人間性も問われます。

医学部受験の現状と、合格へのポイント、そして受験生に求められる力や人間性について、医学部予備校富士学院学院長坂本友寛先生に伺いました。

平野 まず、平成27年度の国公立・私立を含めた医学部医学科入試の現状についてお話し頂けますか？

坂本 はい、国公立の一般入試の前期・後期日程での受験者総数は18,657名で、実質倍率は4.2倍、私立医学部の受験者総数は96,559名で実質倍率が16.7倍となっています。それぞれ推薦、AO入試の受験者を含め、昨年と比較をすると国公立が

1,382名のマイナス、私立が415名のプラスで、合計すると967名のマイナスとなっています。

平野 若干ですが、減少傾向にあるという事ですか？

坂本 いえ、受験者が昨年と比較して減少傾向にあるのは国公立の一般入試だけで、国公立の推薦入試も私立の一般、推薦入試共に昨年よりも受験者は増えており、医学部人気の高さはこれまで通り全く変わっていません。

平野 国公立の一般入試の受験者が少し減っているのは何か理由があるのですか？

坂本 はい、ここ数年前まではセンター試験の難化などがあり、国公立医学部の志願者で思いのほか点を取れなかった受験生が他学部に変更したり、私立医学部にシフトしたケースが多くありました。また昨年と今年度に関しては、新課程入試の影響で、何としても今回で決着をつけたいという層が、これもまた他学部に変更するケースが多くあり、国公立医学部の受験者が少し減少したと考えています。しかしいずれにしても、他学部に変更した層は中間以下の学力層で、高学力層はそのまま残っている訳ですので、実質倍率は少し減っても実際はこれまで通りのハイレベルの戦いになったと思います。

平野 その厳しい医学部医学科の受験を勝ち抜くポイントがいくつかあると思いますが、そのポイントについてのお話しをお願いします。

坂本 はい、ポイントはもちろんたくさんあるとは思いますが、私が一番重要なポイントとして考えているのが、学習環境ですね。人は多かれ少なかれ、その環境に左右されます。医学部合格に向けて勉強を頑張っていく中で、その学習環境が本人に一番合った、また必要な学習環境で勉強が出来るのかどうか、ここ

が一番大きなポイントになると思います。

平野 たしかに人は環境に左右されますよね。本人が勉強を頑張ろうと思っても周りがそうではなかったり、逆に周り切切磋琢磨出来る環境だと、勉強も頑張れるし成績も上がっていきます。

坂本 そうです。環境は本当に大事です。だからこそ、本人に一番合った、また必要な学習環境で勉強を頑張る事が重要だと思うのです。もっと言えば、大手予備校や塾などで行われている大人数の集団授業がありますが、集団授業ではライバルがたくさんいる事で、自分の目標となる生徒達と切磋琢磨出来、勉強を頑張る上においては良い環境ですが、その反面、集団授業についていけない学力が仮に乏しければ、集団の中で埋もれてしまうという危険があります。また生徒が多い為に、質問がしたくても出来ないという環境は、多くの生徒にとってはマイナスとなります。

平野 大手だと安心だからとか、友達も行ってるからといってその予備校や塾に行くケースがよくあると聞いています。

坂本 そうですね。私共富士学院でも大手予備校に何年も行って結果が出ず、富士学院に相談に来るケースはよくありますが、今春、2浪めで富士学院から名古屋市立大学の医学部に合格したY君は、1浪の

株式会社CMP
代表取締役
教育ジャーナリスト

平野晃康



時は地元の大手予備校に通っていて、何でその予備校に行ったのかと言うと、〃高校の友達がみんなそこに行ったので、自分もあまり考えずに行きました。と言っていました。(笑)

平野 彼も俗に言う大手で埋もれていたのですか?

坂本 Y君は富士学院に来た当時でも、偏差値で言うと65近くはあったので、大手で埋もれていたという表現は少し違うと思います。ただ彼が言っていたのは、富士学院に来てから〃細かく自分の事を見てもらい、偏差値だけではわからない色々な穴に気づく事が出来、本当の力がついた。という話しをしてくれました。

平野 他にもそういう生徒はいませんか?

坂本 はい、それはもうたくさんいます。今春合格した生徒の中では最高で大手に5年行っていて、全く芽が出ず、富士学院から一年で合格出来た生徒もいます。

平野 環境が変われば変わるのですね。

坂本 その通りだと思います。ただ私が言いたいのは、大手だから良いとか悪いとか、集団授業が良いとか悪いとかではなく、その環境が本人に合っているかどうかが一番大事だということです。

平野 よくわかりました。あと学習の環境というと、本人に合ったオーダーメイドで授業を行うという個人指導が今人気ですが、これについてはどう思われますか?

坂本 個人指導は富士学院でも富士ゼミと共に富士学院の指導の柱のひとつとして行っています。個人指導の良いところは、まずその生徒の現状に合わせて指導が出来る事です。場合によっては前に遡りながら指導を行え、不得意科目の克服や苦手分野の克服などの効果も期待出来ます。ただどうしても講師、生徒1対1での指導の為、生徒が講師に必要以

上に依存してしまうケースや他の生徒との刺激や切磋琢磨出来る環境がないというデメリットがある事も事実です。

また、指導している講師との相性なども含めて、学力が向上出来るかどうかは講師の質による処が大きく、いずれにしても、集団授業と同じですが、個人指導だから良いとか悪いとかではなく、本人の現状に合わせて一番必要な学習環境の下、学習を行う事が必要です。

平野 富士学院として個人指導を行う場合に、特に意識をしている事はありますか?

坂本 はい、特に意識をしている事は、生徒との距離間です。そして指導を通して生徒自身に自覚と自立を促す事です。ただ勉強を教えるだけではなく、生徒自身にしっかりと考えさせ、理解させていく。このことを意識して指導を行っています。

平野 ありがとうございます。他には合格のポイントで何かありますか?

坂本 はい、どうしてもこれはお伝えしたいことですが、これも学習環境のひとつになりますが、医学部合格のためには、医学部受験の学習環境がひとつのポイントになると言う事です。この医学部受験の学習環境があるのかどうかは、医学部を目指す上において特に今は大きな

意味を持つてくると思います。

平野 少し具体的にお話し頂けますか?

坂本 はい、先程、名古屋市立大学に合格をしたY君の話をしましたが、Y君も決して成績が悪かった訳ではないのに現役時代と一浪時代には全く結果が出ませんでした。大学毎の医学部医学科の、合格不合格者の偏差値分布を見ても、偏差値が70を超えている受験生でも相当数不合格になっている現実があり、逆に偏差値が60を切る受験生が合格を果たし



自分に合った又
必要な学習環境を
探すべきです

ているなど、毎年たくさんの逆転現象が起きています。つまり、学校の勉強が出来ているからといって、また偏差値が高いからといって、それがそのまま医学部合格に直結しないというのが医学部受験です。

医学部医学科の入試は他の学部の入試とは違い、大学に入る為の入試にプラスして、医師になる人を選抜する試験という意味合いがあります。その為に医学部入試には学力試験とは別に多くの大学が面接・小論文試験を課します。

また学力試験においても、医師として必要な粘り強い思考力を問う医学部独特の問題が多く出題され、またその上で大学毎に出題の傾向も違います。

また大学毎で合否判断の基準も違い、これらを含めた情報があるのかどうかは大きな差となります。

平野 医学部受験の情報がどれだけあるのかが、合格に向けてのひとつのポイントになるという事ですね。

坂本 はい、その通りです。で、ここでもうひとつ大事なポイントをお話ししますと、確かに医学部受験の情報は大きなポイントとなりますが、大事なはその情報を生徒にしっかりと活かせる環境があるかどうかそれがそれ以上に大事だと思います。

今年の4月に富士ゼミの私立医学部コースに入学したA君とB君は昨年まで、全国に展開する医学部専門予備校に年間を通して通っていました。今春の2人の金沢医科大学の成績開示資料を見ると、二人共、一次の合格最低点を大きくクリアした一次の点数を取っていましたが、二人共に補欠止まりという結果に終わっています。富士ゼミ生で今春同じ金沢医科大学を特待で合格した生徒よりも一次の点数を取っているのに、なぜ合格できなかったのか?理由は二次試験のグループ面接でした。特に

A君はグループ面接の内容についても、また指導も具体的に受けておらず、グループ面接をディベートと勘違いをし、徹底的に相手を負かせた結果が一次合格最低点を大きくクリアした上での、補欠止まりという結果でした。

医学部専門予備校としてたくさんの情報を持っているはずなのになぜこんな事になったのか?理由は色々あると思いますが、どちらにしてもいくら素晴らしい情報があっても、その情報を生徒に活かせる環境がなければ全く意味がないという事です。勉強を頑張るのはも

ちろん本人ですが、その周りの環境もとても大事です。〃どういう環境で勉強を頑張るのか。それは周りに流されるのではなく、また情報に振り回されるのではなく、出来る限り自分の目で見て自分で決める事が大事です。本稿ではその事を少しでもご理解頂けたら幸いだと思います。

平野 全くその通りだと思います。最後にこれを読んでいる生徒達に一言、アドバイスをお願いします。

坂本 医学部に入るという事は、医師になるという事です。まず、この事をしっかりと自覚してください。医師の仕事は生命と向き合い、絶えず勉強が必要な大変な仕事ですが、その分たくさんの感謝がもらえ、やりがいのある素晴らしい仕事です。立派な医師として活

躍する為に今の苦勞があります。大きな明るい未来を目指してこれからもしっかりと頑張ってください。

最後に、これからの医学部受験は2023年問題もあり、浪人生には更に厳しくなってくる事が予想されます。出来る限り現役で、そして浪人生は一年も早く医学部に合格する事を目指し、今、何をやるべきか、何が大事なのか、その学習環境も含めてしっかりと考え、行動してもらいたいと思います。また、私達に出来る事があれば何でも相談してください。



情報をいかに
活用できる体制かが
大切ですね。





これからの 医学部受験と 受験生に 求められる力

富士学院
学院長
坂本 友寛

医学部の入学試験は、医師になるための最初の大きな試験であり、高い学力だけではなく、医師になるために必要な様々な資質も問われます。各大学では、「学力試験」に加えて「小論文」「面接試験」等を通し、受験生をしっかり見ていくのもこのような理由によるものです。本稿では、長年の指導経験と現在の医学部受験の環境から、これからの医学部受験生に求められる力についてお話しさせていただきます。

医学部を受験するという事は、当たり前ですが医師を目指すという事です。ここが同じ入試でも他学部の入試とは全く違う部分であり、他学部では大学に入学後、将来を決めていく事になる為、その選択肢を広げる意味で、大学入試はひとつの目標でありゴールとなり得ます。しかし医学部入試は合格がゴールではなく、医師になる為の新たなスタートとなり、また大学には入学させた学生達を進級させ、卒業させるだけではなく、医師国家試験に合格させ、将来社会に貢献出来る立派な医師として社会に送り出す大きな役割と責任が求められてきます。そ

ういう意味においては、医学部入試の本質は各大学がそれぞれのアドミッションポリシーの下、自らが医師として育てていく学生達を選抜していく試験であり、他学部のように単に頭の良さを競い合う大学入試とは全く違う入試であるという事を、まずしっかりと理解すべきです。

まさしく、医学部入試は医師になる為の試験であり、大学側が入試を通して見ているものは、「医学部6年間をしっかりと頑張れるのか」、「医師国家試験に合格出来るのか」、「将来医師として社会に貢献出来るのか」であり、この3点をそれぞれの大学が学力試験や面接・小論文試験等で評価をし、合格を決めています。

各大学が独自に行う学力試験の出題傾向や、大学毎の合格判断基準は大学毎で様々ですが、最近の医師国家試験を見ると暗記型問題が減り、思考力や判断力を問う問題解決型の問題が増えている現状を踏まえ、最近の入試問題では、難解な問題を解かせるよりも、時間の制限がある中で問題を正確に読み取る力や持っている知識をいかに活用出来るかを見るために、医学部独特の考えさせる、つまり「思考力」を問う問題が多く出題される傾向が強くなっています。

この事は、医師として間違いのない診断をするために、粘り強く思考出来る能力の有無を大学として見ている部分も多々あると思います。また、総じて合格に対する面接・小論文の評価の割合が高くなっており、医師として必要な「思考力と判断力」の他に、「コミュニケーション能力や協調性」また「人間力や人柄」などもこれまで以上に重要視されてきているのが現在の医学部入試の特徴です。

実際に、医療の現場の求めるものが変わり、医師国家試験が変わる事で、医学部入試も必然的に変わっていく中、今回の2023年問題で、現在各大学で見直されている医学部教育カリキュラムの大幅な変更は、今後の医学部入試にも当然大きな影響を及ぼすことが考えられます。国際基準に向けて大きく舵を切る日本の医学教育の中で最も変化するのが臨床実習です。これまでは約1年間で行なわれてきた臨床実習が今後は倍の約2年間となり、しかも参加型の実習が大幅に増える新カリキュラムに変わります。この事は従来の講義にける時間が大幅に圧縮される事につながり、医療の進歩に伴い、勉強する量が増え、質も高くなっている中、医大生の負担や指導する大学側の負担はこれまで以上に大きくなります。大学側はあまり公表していませんが、今の時点でさえ、様々な理由で留年する生徒や退学になる生徒が一定の割合で居る中、医師国家試験の浪人者も含め、極端に言えば医学部に合格しても医師になれるとは限らない現状の中、このカリキュラムの大幅な変更は、医師を目指す、また指導する全ての人に

とっての新たな試練となります。

今後、医大生として、また医学部を目指す受験生や学生として大きく問われる事は、医師になるという高い志とその覚悟に他なりません。そしてその志と覚悟に基づき、自覚と自立が出来ているのか、自学自習が出来ているのかが今後は大きく問われてきます。当然医学部入試においても至るところで、この事が問われてくるでしょう。医学部を目指す生徒を預かる私達にとっても、今後は預かった生徒達をただ医学部に合格させれば良いという考え方ではなく、合格はもちろんですが、その後の医学部6年間を踏まえた指導を意識し、6年間の大変な勉強をしっかりと頑張れる下地を作った上で、大学に送り出すという意識が必要となり、今後は指導する側にもこの事が大きく問われてくると思います。

私共富士学院では、生徒の志と覚悟を高めていく為に、面接指導や生徒面談を他のどの予備校や塾よりもたくさん行っています。その分、勉強時間が少なくなると心配されるかも知れませんが、この多くの面談が生徒自身の自覚を促し、自らが勉強に向かえる全体の空気感をつくり、高い合格実績にもつながっています。いずれにしても難関の医学部合格を勝ち取る為には、受験生本人の「何としてでも医学部に合格する」という強い決意と覚悟が必要であり、又それを後押しする周りの環境も必要となります。特に医学部教育カリキュラムが大幅に変ってくる今後においては医学部受験の学習環境の有無とその質は合格に向けて又その後の医学部6年間を見据えた上での大事なポイントになると思っています。

お問い合わせ先

富士学院 各校舎

※詳しくは本紙P38、P39をご覧ください

名古屋校/岡山校/福岡校/鹿児島校
東京御茶ノ水校(2016年開校)

富士学院

創業から20年、医学部受験の専門予備校として全国に展開し、来春、いよいよ東京校を開校。

私共「富士学院」は医学部を目指す生徒のための「医学部受験予備校」として、1995年2月に福岡の地で創業し、今年2015年2月をもちまして、開校20周年の節目を迎える事が出来ました。

現在、校舎は北から名古屋校・岡山校・福岡校・鹿児島校の4つの直営校を運営し、医学部予備校の中では西日本最大級の規模を誇っています。これまでに、952名の医学部医学科の合格者を輩出し、また来年春には待望の東京校を開校します。この東京校の開校により、今後は全国の

医学部を視野に入れ、大学毎の様々な指導を更に充実させる事が可能となります。各校舎での指導の中心は高卒生を対象とし、年間を通して指導を行う富士ゼミと、現役生と高卒生を対象にした個人指導の2つの柱を中心に、共に生徒の自覚と自立を促しながら、生徒が自ら勉強に向かう学習環境を常に意識し、指導を行っています。また、鹿児島校を除く各校舎には、男子寮、女子寮及び三食を用意する食堂を完備し、生徒達の健康管理と生活管理を行いながら、勉強に集中出来る環境も整えています。また富士学院には、富士学院の卒院生達で構成される「富士OB会」があり、現在メンバーは総勢280名を超え、多くの卒院生が全国各地で医師として活躍しています。

お預かりした生徒の自覚と自立を促す、私達「富士学院」の理念と心構え

私共は開校以来、一貫して「生徒のために出



来ることは何か、を考え日々行動してきました。年々受験者が増え、難易度が上がっている医学部受験において、「お預かりした生徒一人ひとりを合格に導くためにはどうしたらよいか、更には「ただ合格させるだけではなく、医学部に入ってから6年間をしっかりと頑張って歩んでいける下地をどう創ってあげようか」。これまで試行錯誤を繰り返しながら、日々生徒と向き合い指導を行ってきました。

FC(フランチャイズ)による全国展開をする医学部予備校がある中で、富士学院が直営校にこだわるのは、富士学院としてお預かりした生徒一人ひとりを、学院として責任を持って指導していくという強い思いがあるからです。その為に富士学院では常に意識していることがあります。それは本来の教育の意味である「教える、育む」という教育を、講師・職員共に最後まで徹底して実践していくというものです。「育む」の語源は親鳥がひなを羽で「羽(は)含(く)む」からきていると言われています。親鳥はひなを自分の身を挺して外敵から守り、しっかりと成長させていきます。そして親鳥のもと、成長したひな鳥はやがてそこから巣立っていきます。

この事を私達に置き換えて考えると、将来の日本や世界の医療を担う大事な生徒達を、責任を持ってしっかりとお預かりすること。そして日々の授業や生活を通し、生徒一人ひとりに自覚を促し、成長させ自立に導いていくこと。それこそが教える教育だと思っています。

本当の教育とは教える事だけでなく、生徒をしっかりと成長させ、正しい自立に導いてこそ本来の教育です。その教育を実施するためには、指導する立場にある私達が、覚悟を持って日々生徒と向き合い、共に成長していく事が必要であり、



私達自身が生徒のより良い見本になっていく事が必要不可欠です。富士学院の理想とする教育は正にここにあります。また、富士学院の大きな特徴のひとつに、常勤講師と教務職員が数多く在籍している事が挙げられます。これは生徒を中心とした各科目の講師陣、職員がチームとして機能していく為には必要であり、これにより初めて、生徒の情報をきちんと共有し、入試情報を共有しながら指導を進めていく事が可能となります。この生徒を中心としたチームの存在は、生徒の自覚と自立を促し、一人ひとりの生徒が、今何をやるべきか、やる意味も含めてまっすぐ受験に向かう空気感が自然と出来、それが全体の学習環境をつくる要因にもなり、学院全体の高い合格実績にもつながっています。大事な事は、生徒自身が自ら自覚し、自らが勉強に向かい、切磋琢磨できる環境の中で、生徒自身が日々成長していく事です。その学習環境をつくっていく為にも必要なのは、指導を行う我々が、常に教育者としての自覚と責任を持ち、覚悟を持って、指導を行っていけるかどうかであり、私共は常にその覚悟が問われていると思っています。

富士学院はこれからも、お預かりした生徒一人ひとりの目標達成のために生徒と共に日々成長し、努力を重ね、生徒の目標を達成していくと共に、教育業界や医療業界の発展にも大きく貢献出来るよう、今後も真摯に努力を続けて参ります。

お問い合わせ先

東京校開校については ☎0120-5251-22までお問い合わせ下さい

名古屋校: ☎450-0002	愛知県名古屋市中村区名駅3丁目8-7 ☎0120-9816-33
岡山校: ☎700-0027	岡山県岡山市北区清心町3-27 ☎0120-9179-00
福岡校: ☎812-0016	福岡県福岡市博多区博多駅南3-2-1 ☎0120-5251-22
鹿児島校: ☎890-0046	鹿児島県鹿児島市2丁目21-3 ☎0120-66-9179